46

香川修庵『一本堂薬選』の成立過程

星野　卓之，小田口　浩，花輪　壽彦
北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】香川修庵（1683–1755）の『一本堂薬選』（以下『薬選』）全四編は，享保 16 年（1731）より元文 3 年（1738）にかけて出版された．その自序に「往年因一門生請，卒爾草『薬能』一書．未定冊子，誤落于人間，伝訛豕亥，転相市虎．今而噬臍矣．駟不及舌．是故改著『薬選』首徴前書之非真，仍資子弟之初課，亦小苦心耳」と著作した意図を述べている．後藤艮山（1659–1733）及び門人らによる『薬選』関連の著作は主に写本であり，その成立過程につき詳細な検討はなされていない．

【方法】刊本により異なる『薬選』跋文を検討した．内藤記念くすり博物館など所蔵の後藤流写本群から『薬選』に関連する記載について調査した．

【結果】『薬選』跋は二種みられた．下編の後半を占める附録の末尾に「跋薬選下篇」と題し「享保十九年（1734）歳次甲寅孟冬下澣 龍洲伊藤元弘謹書」とする刊本と，上編の自序と凡例の間に「跋薬選」と題し「享保甲寅（1734）中秋月夕香川修徳修庵書」とする刊本があり，後者は『薬選』編集に関する記載があった．艮山から尽く医を授けられ「一本之道」をともに講習討論し，後を任された修庵は己酉（1729）春に『薬選』上編を刊し，諸子弟に授けた．読んだ艮山は批判されることを恐れたが，修庵が伊藤仁斎の逸話を紹介し心配は不要と答えたところ驚喜したという．壬子（1732）春に中編が出版され，近日下編を出版するとあり『行餘医言』は未だ脱稿していないことも触れている．『薬能』は写本ごとに異同があるが『艮山先生定薬能』（内藤 36412）は整っており，三十六品の薬味と三文字からなる薬能に続き「後選八十一品主能」として薬味と八文字の薬能を記した内容であった（一部写本では八十一品の薬味はない）．尾池家に伝わる『師説筆記』五巻本では『薬能』は漢文の主治を含んで巻之三にあり，巻之四に『薬能附録』として和文で『薬選』に通ずる選品・修治が 36 の生薬について解説されていた．『艮山先生薬能』（内藤 36354）では上九品（人参・白朮・甘草・桂枝・芍薬・茯苓・半夏・乾姜・附子）と中二十七品に分けられていた．神宮文庫所蔵『艮山先生手定薬能』はこの上九品の順に収録し，日本・中国どちらの選品が良いかも示すが，尾池本より漢文主治に誤記が多かった．また香川修庵『活所薬能』（内藤 32968）に引用される艮山の主治はより簡素で，「修徳」に続く本文は『薬選』に近い長文となっていた．また『後藤養庵医説』（内藤 33386）の後半に「薬選頭上桂芍後剤辨　後藤一述」があり『薬選』収録順について「『薬撰』は外邪を主として解たる書なり．『薬選』と云題にても知へし．是薬選の大段也．張機，傷風寒の邪気の為に桂枝湯を第一方とする趣を取て桂・芍を首条に出し茯・半・朴・只［ママ，枳］は順気剤の本薬なれども吾門もと内積，根木皮の治する事能わす当分の塞りを去り内積の未熱を散する斗り也」との記載があった．

【考察】『薬能』が修庵によりまずまとめられたのは，重要生薬の味や適応症候名を後藤流の入門者が最初に学ぶためであったが，現在残る写本でも確認できるように誤りや脱落が転記されるうちに増えて流布することとなった．また限られた数文字で薬能をまとめる形式からも『薬選』の完成度とはかけ離れたものであった．そして選品・修治について師弟で議論した内容が『活所薬能』で拡充され『薬選』となった．桂皮・芍薬を筆頭にする記載順も艮山の論に『薬選』が倣ったと推察される．艮山の意図と反して中心生薬 36 種を上品と中品に分け，その記載順に変更した『薬能』は，転記に際し派生したものと考えられる．

【結論】『薬能』に端を発した『一本堂薬選』の成立過程が一部明らかとなった．